

経済地理メモ—社会主義国編—13

キューバ

地質相談所 (Geological Consulting Office)

国名 キューバ共和国 (República de Cuba)
面積 111,000km²
人口 ほぼ1,000万人 (1981)
首都 アバーナ (la Habana) (日本では一般にハバナとよぶ)

国土

キューバは多数の島々からなっているが キューバ島が総面積の約95%を占め 約2%を占めるフヴェントゥ島 (旧名・ピノス島) を除くと 残りは4,000をこえる小さな珊瑚礁の島々である。このキューバの島々はいずれも熱帯に属し 北緯20°から北回帰線の間分布する。キューバ島は東西に長く 東西延長が1,250kmであるのに対し 南北は30—190kmにすぎない。それでも大アンチル諸島の中では最大の島である。同島は主に平野と丘陵地で形づくられ 山岳は少なく 東端部にシエラ・マエストラ山脈がある程度で キューバでもっとも高い山 トウルキノ山 (海拔2,005m) はそこにある。

経済地理的な位置

キューバは四辺を海に囲まれ 最大のキューバ島でも任意の地点から海岸まで100kmもへだたっていない。この事実は国土開発によい条件を与えている。北はアメリカのフロリダ半島まで最短距離でわずか180kmをへだてているにすぎず 西はメキシコのユカタン半島まで210km 南は幅140kmのコロン海峡をへだててジャマイカ島に対し 東は幅77kmのウインドワード海峡をへだててハイチ島にいたる。これらの国々はいずれも資本主義経済体制下であり キューバの社会主義経済体制と仕組を異にするため キューバは経済地理的には不利な位置にある。経済相互援助会議加盟諸国の中でキューバ1国だけが他の加盟国からとび抜けて遠隔の地に存在することは その経済環境の不利さを増大し 経済相互援助会議の負担を大きくするものといえるだろう。

人口

キューバの人口は1981年にほぼ1,000万人に達し 1985年6月号

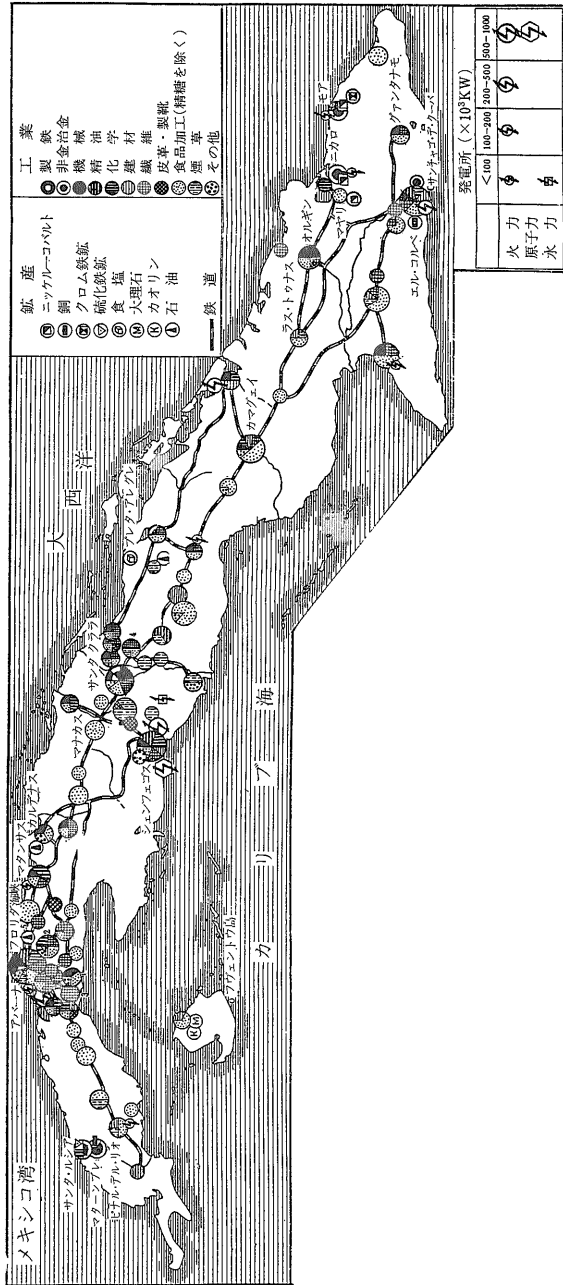
の人口密度90人/km² はラテンアメリカ最大である。最近の人口増加率は1.2%前後で 日本の2倍に近い。人口の32%が8大都市 (人口10万以上の都市) に集中し 首都アバーナ (日本ではハバナとよぶ) には190万人をこえる人々が居住する。キューバは多民族国家で スペイン系 原住インディアン系 アフリカ系 中国系の民族とそれらの混血人が多い。人種差別は全くみられない。労働人口の約40%は農業に 約20%は鉱工業に従事し 他のラテンアメリカ諸国に較べて教育にたずさわる人々の率と学生の割合がとくに高い。

経済の全般の特徴 (第1図)

社会主義国キューバは1959年1月に誕生した。それ以前のキューバの経済は主体が農業 それも砂糖きびに依存した単作農業で成りたっていた。そしてこの単作農業は全体として外国市場に 何よりもアメリカの市場に従属していた。革命後 キューバは社会主義諸国の援助を得て経済の建て直しにとりかかり 鉱工業の建設も進んではいるが 現在もまだ特殊な社会的・歴史的條件の影響が経済にも色濃く残っていて 農作物の加工 (砂糖・たばこ・かんきつ類) が国家経済の基礎となっている。キューバは経済相互援助会議 (C 9 B いわゆるコモコン) の一員である。その中でキューバは蔗糖 たばこ かんきつ類の輸出がぬきんでているし 鉱産物の輸出も多い。とくに蔗糖は対経済相互援助会議加盟国への全輸出量の3/4をこえている。このような輸出部門の発展を基礎に工業化への移行や多角的経済への移行が企られつつある。キューバでの経済の発展テンポは経済相互援助会議加盟国の中では上位に入る。

鉱業と鉱産物

キューバの地質は始新世末期の褶曲島弧の形成とその後の構造運動によって複雑なものになっている。火成岩中に多くの鉱床が胚胎されているが その中でも大きな価値をもっているのがニッケルとコバルトを含有したラテライト鉱床群である。この鉱床群は世界的にも価値があり 埋蔵Ni金属量は億t台といわれ 2・3の文献によると 世界のニッケル埋蔵量の20%以上をキューバ一国が占めているとのことである。山地・丘陵地域に



第1図 キューバの産業配置

は多数のクロム鉄鉱床 マンガン鉱床 銅鉱床 鉛・亜鉛鉱床が分布する。キューバの金属鉱床の主な分布地域は次の3地域でうち2地域は東部の山地・丘陵地域にある。

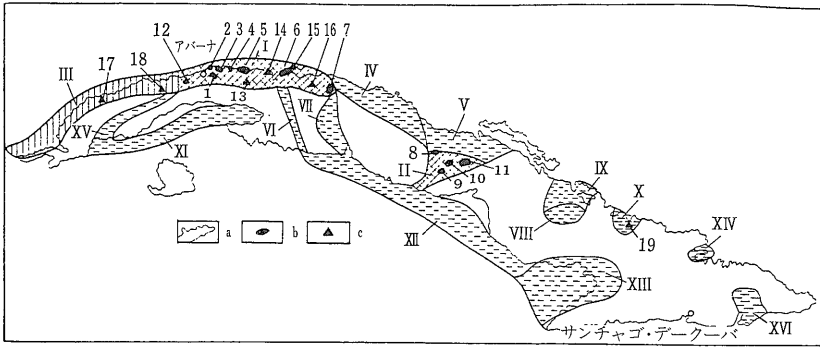
1) 東北鉱床区(マヤリーニカローモア鉱床区)——これはニッケル-コバルト-鉄鉱床とクロム鉄鉱床の分布区

で ニカロ・モア両鉱床の総鉱量が Ni 1-1.5% Fe 38-42%として 30 億tと見積られ クロム鉄鉱床は金属用と耐火材用に適するものである。

2) 南東鉱床区(この区の主体はシエラ-マエストラ山脈)——これは鉄鉱床 マンガン鉱床(最近 古第三系火山源岩-堆積岩層群に胚胎されたマンガン鉱床が多数発見されている)と銅鉱床の分布区である。

3) 西鉱床区——これはオルガノス山地中の銅鉱床 鉛・亜鉛鉱床 マンガン鉱床の分布区である。

また オルギナ地区 フェントウ島などには金鉱床があり フェントウ島の西部にはキューバ唯一のタングステン鉱床が存在する。硫化鉄鉱床も賦存し とくに稼行価値が大きいとされているのはグアムアヤ山地のグアチナンゴとカルロタの両黄鉄鉱床である。以上のように キューバには重要な金属産地が分布しているが 探査ずみの燃料鉱物資源は乏しく そのことが資源確保上の弱点となっている。燃料鉱物資源としては泥炭が多いだけ(埋蔵量は乾量で5,000万tをこえる)であり それはサバタ半島に賦存している。既知の油層および天然ガス層は規模が小さく 今のところ稼行価値があるのはキューバ島西部の北海岸(アバーナとカルデナスの間)の油田群だけである。アバーナ州には石油起源の瀝青岩が存在する。総じてキューバの地下資源に対する調査・研究は不十分にすぎる。一方 非金属産物資源としては石灰岩 マール ドロマイト 大理石 石膏 珪砂 カオリンの埋蔵量が非常に大きい。北部海岸地帯には岩塩も分布する。前記のニッケル産物資源を活用したニッケル精鉱の生産量は世界第5位で(カナダ ソ連 ニューカレドニア オーストラリアに次ぐ) ニッケルの地金と合金の生産と輸出も盛んである。とくにニカロとモアには近代化された選鉱-製錬所があり ニッケルとコバルトの精鉱生産量はキューバ1・2位を分け合い キューバ全体でのニッケル-コバルト生産物の生産量は1981年に4万tに達し さらにモアの東 プンターゴルダに新大型ニッケル製錬所が建設されている。製鉄所としては現在のところアバーナとその近郊に小規模な 主として輸入原料に依存した製鋼・圧延・鋳物工場群があるだけで その中で大きいといわれるアバーナ南東郊外のホセマルチ記念製鋼所でも年間製鋼量は60万tにすぎない。しかし 上述のニッケルとコバルトを精錬したあとの鉄鉱と他の国内産鉄鉱を使用するキューバ初の鉄鋼コンビナート(鋼鉄生産能力130万t/年)がサンタクララ市近郊(?)に建設されつつある。そのほか 重要な選鉱所付設の鉱山としてはサンチアゴ・デ・クーパー州にマンガン鉱山が ピナル・テル・リオ州のマタームブレに銅鉱山がある。



第2図 キューバの石油・天然ガス胚胎ポテンシャル概要図

- a—堆積盆地
 I—北キューバ油田・ガス田生成盆地
 III—前ピナル予想油田・ガス田生成盆地
 V—モロン推定油田・ガス田生成盆地
 VII—メルセデス推定油田・ガス田生成盆地
 K—ヌエビタス推定油田・ガス田生成盆地
 XI—バタバノ推定油田・ガス田生成盆地
 XIII—カウト推定油田・ガス田生成盆地
 XV—ロス・パラシオス推定油田・ガス田生成盆地
 XVI—グァンタナモ推定油田・ガス田生成盆地
- II—中部キューバ油田・ガス田生成盆地
 VII—ウベロ推定油田・ガス田生成盆地
 VI—コチノス推定油田・ガス田生成盆地
 VIII—カリフォルニア推定油田・ガス田生成盆地
 X—プエルト・パドレ推定油田・ガス田生成盆地
 XII—南キューバ推定油田・ガス田生成盆地
 XIV—ニベ推定油田・ガス田生成盆地
- b—油田
 1—バクラナオ・クルスベルデ 2—サンタ・マリア 3—グアナモ・ペニヤス・アルタス
 4—ピア・ブランカ 5—ボカ・ハルコ 6—カマリオカ・バラデロ 7—モテンボ
 8—ハラウエカ 9—カタリナ 10—ハチボニコ 11—クリスタレス
- c—旧産油井
 12—マルチン・メサ 13—マドルガ 14—ユムリ 15—チャベリン 16—マルチ
 17—マラス・アグアス 18—パチェコ 19—プエルト・パドレ

第1表 北キューバ油田ガス田生成盆地の油田・天然ガス田（ソ連科学アカデミー編）

大規模構造単元	石油・天然ガス集積区域	油田・ガス田の構造形式	産出層の層位	油田の数	実例
周縁隆起	アバーナ・マタンサス複背斜, アバーナ地塊を横断する	地壘-背斜型	白亜系上部統一始新統下部階	3	バクラナオ, クルスーベルデ, サンタマリア
	モテンボ地塊	同上	白亜系上部統	1	モテンボ
同(西はバクリナル)	マルターマリエル背斜帯	同上	同上	1	マルチン・メサ
前陸盆地南縁	周縁地縫帯	短軸背斜, 横断地こうの存在で複雑化	始新統下部階	2	グアナボ, ペニヤス・アルタス
	前陸盆地内帯のボカ・ハルコ-ピアブランカ背斜	背斜, 横断断層と縦走断層で複雑化	白亜系上部統一始新統下部階	2	ボカハルコ, ピアブランカ
	カマリオカ・バラデロ背斜		白亜系上部統一暁新統	2	カマリオカ, バラデロ
	イカコス・チャベリン地壘状帯	地壘	白亜系下部統	1	チャベリン

我が国との関係

キューバは1945年10月に国連に加盟し 我が国とは1930年4月に公使を交換し それが1957年に大使に昇格した。在日キューバ大使館は東京の六本木に在る。我が国との貿易は往復 24,100万ドル (日本の対外貿易総額の0.1%; 1983年) 日本からの輸出額が12,600万ドル (0.1

%) 日本への輸入額が11,500万ドル (0.09%) にすぎずこの10年間にふりかえてみてもそれほど大きな変化はないが 日本のコロイド硫黄輸出相手国としては2番目(1980年)であり 日本へのニッケルや砂糖などの供給国としてキューバはたいせつな存在といえよう。

(文責; 岸本文男)